人間文化論叢　第8巻　2005年

# 明治期における女子高等師範学校の遠足

## ——お茶の水女子大学附属図書館所蔵絵巻から——

髙　槻　幸　枝*

# The Excursion of the Women's Higher Normal School in the Meiji Era:

## A Picture Scroll Owned by the Ochanomizu University Library

TAKATSUKI　Yukie


### abstract

In this paper, I introduced a picture scroll of the excursion of the women's higher normal school that has been preserved in the Ochanomizu University Library and also considered the characteristics of the excursion.

The excursion, which witnessed nearly 100-percent participation, was organized in May, 1894. Drawn by two teachers of the school, the picture scroll depicts 12 scenes comprising sentence-picture sets. The departure was the school gate in Ochanomizu and the destination was Yuten-ji Temple in Meguro. The course of the trip seems to have been various in each group and 10 stopover sites were drawn in the picture scroll.

I examined five sightseeing guidebooks to check whether these sites had been published in them on a simultaneous period. The Sengaku-ji and Zojo-ji temples, Meguro Fudo, and Mt. Atago-yama appeared in all the guide-books; Okubo, three; Yuten-ji temple, two; Kishimojin, the arched bridge, and the Yebis Beer factory, one; and Aoki Konyo's grave did not appear in any guide-book. It seems that there are elements visiting social studies in Yebis Beer factory and AOKI Konyo's grave. Moreover, from this perspective, it can be stated that the sites related to women, such as Asaoka's grave, have been focused upon.


Key words : excursion, picture scroll, women's higher normal school , sightseeing guidebook, Meiji era

## Ⅰ　はじめに

本稿は、1894（明治27）年に実施された女子高等師範学校[1)]（現・お茶の水女子大学、以下、女高師とする）の遠足の様子を、それを描いた絵巻をもとに紹介するとともに、その立ち寄り先や注目されている事物の特色について若干の考察を加えるものである。

明治期の遠足については、主に教育史の観点から検討が加えられており、学校行事としての遠足・修学旅行[2)]の発展過程についての考察（平野 1971；守田 1983；増井 1999；浜野 2002, 2003 など）、がなされてきた。しかし、これらの研究においては、立ち寄り先に関してはほとんど触れられていない。一方、遠足および修学旅行を旅や観光の一形態として捉えた研究には、修学旅行の歴史を概観した北川（2002）、さらに具体的な見学先とその特徴について触れている白幡（1996）や、明治30年代の修学旅行用ガイドブックを〈学ぶ旅〉の事例として紹介

キーワード：遠足、絵巻、女子高等師範学校、観光案内書、明治期

＊平成16年度生　複合領域科学専攻

した五井（2000）などがあるが、やはり個々の立ち寄り先にはあまり関心が向けられていない。近代東京の観光名所に関しては、鈴木（1995）が2時期の観光案内図と当時の新聞記事から新旧の名所に対する認識の違いを分析しているが、認識の主体についての具体的な言及はない。山本（2003）は、観光案内書が明治30年代頃を境に、上京してくる観光客向けのものと東京在住者向けのものに分化することを指摘し、さらにやや時代は下るが、大正期に学校関係者が学生向けに編纂した東京の案内書と京都の案内書の簡単な比較をおこなっている。また、明治30年代における女性の旅行について大泉（2000）は、雑誌『旅』の記事からツーリズムと「良妻賢母」思想について論じている。しかし、観光客の属性とその具体的な立ち寄り先に着目した研究は多くない。

これらを踏まえ、本稿では絵巻の紹介に加えて、そこに描かれた遠足の様子と同時期の観光案内書との比較から、女高師の教師および学生の集団が観光名所に対して示す価値観の一端を明らかにしたい。観光地の魅力について考える際には、観光客の属性による着眼点の相違は興味深い要素である。また、このような遠足の事例を多く収集・整理することで、一般の行楽と学校遠足の関係を検討することも可能になると思われる。

検討の対象とする絵巻は、女高師教授であった荒木寛畝[3]が描いた遠足の風景に、同教授、小中村義象[4]が詞書を付けたものである。寺社の境内の様子や女学生の服装は、かなり正確に描かれている[5]。『お茶の水女子大学百年史』（1984）や、お茶の水女子大学附属図書館のwebページに取り上げられてはいるが、今まで全場面についての内容の紹介はなされていなかった。なお、『お茶の水女子大学百年史』（1984）では、「郊遊会」[6]の説明の後にこの絵巻が紹介されているが、絵巻と郊遊会の関係には言及されていない。開催時期や参加人数から、本絵巻が郊遊会を描いている可能性は低くないように思われるが、現在のところ確証は無いため、本稿ではこの絵巻に描かれた行事を、より一般的な「遠足」と呼ぶこととした。

ここで、絵巻が描かれた時期の社会情勢及び女高師内の状況を簡単に概観しておきたい。『東京女子高等師範学校六十年史』（1981）によれば、この時期は、明治10年代後半から20年前後にかけての極端な欧化主義への反動から台頭してきた国粋主義が、1890（明治23）年の教育勅語発布にみられるように、教育面にも定着してきた時期にあたるという。具体的には、学校において外国語に代わり国語・漢文が奨励される、女生徒の盛装が禁じられるなどの変化がみられる。女高師においても1893（明治26）年に生徒の服装が洋装から和装に切り替えられ、1894（明治27）年の卒業生は皆和服を着用したという。絵巻にも和装の女学生が描かれている。

## Ⅱ　「絵巻」にみる「遠足」の様子

### 1. 遠足の実施状況

この絵巻には、遠足は1894（明治27）年5月6日におこなわれたとある。「目黒の祐天寺に遊びて、日頃の労きを慰めむ」という記述からは、この行事がレクリエーションとして捉えられていたことが読み取れる。

参加者は男女合わせて100人余りであった。当時の女高師の学生数は96人、教員数22人であり[7]、全校を挙げての行事であったと考えられる。参加者は、事前に決めてあった5～6組のグループに分かれて、早朝に、当時は御茶ノ水にあった女高師校門前を出発している。それぞれに思い思いの経路をとって、午の刻（午前11時～午後1時）に目黒の祐天寺で落ち合うことになっていたらしい。絵巻の各場面も、1つのグループの行程を時系列で描いたのではなく、複数のグループの立ち寄り先を描いているようである。

なお、この絵巻に実際の立ち寄り先が全て記録されているのかどうか、また描かれた場所全てを、実際に作者が訪れたのかどうかについては、はっきりしない。しかし、絵と文章が他者に見せることを前提に作成されたであろうことを考慮するなら、取り上げられた場所が遠足の主要な立ち寄り先であり、描かれた内容は事実に基づいているとみて差し支えないと思われる。

御茶ノ水・目黒祐天寺間は直線距離にして約9Km離れている。途中であちらこちらに寄り道をしながら、全ての行程を歩き通すことができたのか、それとも何らかの交通機関[8]を利用したのかについては、絵巻には言及がない。

### 2.「絵巻」の場面ごとの内容

絵巻に描かれている12の場面（図1-1～1-12）の概要（①）および、それぞれに対応する詞書の概要（②）を示す。

提示の順序は絵巻に準ずる。また、詞書の引用にあたっては、読みやすくするために、句読点をつける、かなを漢字にするなど、表記を変更した部分がある。なお、各場面のタイトルは筆者が便宜的につけたものである。

1）女高師校門前

①画面右手に女高師の門が描かれ、構内から和装の女性７人と帽子を被った洋装の男性２人が外へ出て行く様子が描かれている。女性４人が傘を持っていることが確認でき、うち２人はそれを開いている。男性もステッキもしくは閉じた傘を手にしている。女性は女高師の学生[9]、男性は教師と考えられる。女性の和服は灰色～暗い水色で塗られ、帯も黒または青の無地である。女高師は当時お茶の水にあり、画面の左手には神田川が流れているようである。また、構内にも外にも多くの樹木が描かれている。

②はじめに、出発時刻が「露の干ぬ間」、参加者数が「男女その数、百人にや余りぬらむ」、目的地と目的が「目黒の祐天寺に遊びて、日頃の労きを慰めむ」、遊歩の方法が「かねて五組六組に分かちて、各々志さむ方を辿りて行くべき契りなり」というように示される。さらに「日頃は学びの道をのみ辿りて、物言ふもいかめしきさましたる人々」も互いに打ち解けて、ここが良いのではないか、あそこに寄ろうなど言い合っているのも嬉しい、と出発前の雰囲気を記している。

また、女高師の女性たち[10]の髪型や服装が、「髪を一つ髻に束ねたるは今様を追ふとにもあらず」や「きらびやなる衣とり装う者無き」といった、流行を追わない地味なものである様子が描かれる。そして、学生たちは「もとよりさる境に心を留めねば」、つまり、もともとそういったことには心を惹かれないのだと書かれている。

次の段落では、各グループが目指す方向が、「御茶の水橋を南に渡る者は、芝高輪わたりに心ある者なるべし。小石川四谷を指して行く者は、目白大久保などに心惹かるるならむ」とされ、祐天寺での待ち合わせ時刻が「午の時」であることが述べられ、「心慌しからぬは無し」つまり、気が急かない者はいないとされている。

2）品川

①画面奥には品川の海、中央左には汽車、その手前の大通りには馬車や通行人が描かれている。海には帆掛け舟も見られる。泉岳寺は、画面右側の手前にあり、山門の中には女高師の一行らしき集団が見える。寺院の周辺だけでなく、馬車が通る大通りの傍にも多くの樹木が描かれている。

②忠臣蔵が広く知られている理由が、「義に勇みたるが、自から我が国人の心に通へればなるべし」とされ、苔むして見えない文字もある石塔を、涙ながらに掻き毟って読むのも「あはれ」だと書く。またこの石塔を詠んだ短歌（略）も添えられる。次の段落では陳列されている遺物に関し、再度「あはれ」という感慨が述べられる。

3）増上寺

①こんもりと木が繁った山の上から五重塔の上部が覗いている。海には帆掛け舟が浮かんでおり、山の下には屋根が並んでいる。この山は芝公園内の丸山だと思われるが、高低差がかなり強調されている。塔の周辺には、鳥の群が飛んでいる。画面には一行の姿は描かれていない。

②江戸時代には「天が下にはきらめきけむ」と形容されるように栄えていた増上寺が、今は「松の木陰に五重塔の心細く立てる」という様子であることから、世の移り変わりに思いを馳せる。また、法師の案内で方々を拝んで歩く中に、「静寛院もおはしますぞかしこき」（静寛院もいらっしゃるのは尊いことである）と記す。次の段落では、江戸時代であれば入ることを許されなかった座敷に上がり、東照宮の廟にも増して素晴らしいと聞いていた文昭公の廟[11]を見物しながら、今は金さえ出せば誰にでも見せるようになったという法師の言葉に、江戸時代が遠くなったことをしみじみと感じたと述べられる。

4）祐天寺

①背が高く幹の太い樹木が、画面手前から奥にかけて何本もあり、その隙間から仁王門の一部が見えている。傘を差した女性が５人、男性が１人描かれており、女性の１人は門の方を指差して、何か話しているように見える。

②いよいよ祐天寺に到着する寸前に「長き道に足疲れて、喘ぎ喘ぎ来れば、杉の森遥かに見ゆ嬉しさは飛立ばかりなれども、さ言はむも足弱きやうなれば忍びて行く」（目的地が見えてきた嬉しさを口に出すと、足が弱いように見られるので我慢した）と、感想が述べられる。そして、眼前に近づいてきた大門の様子が「近

図1－1　女高師門前

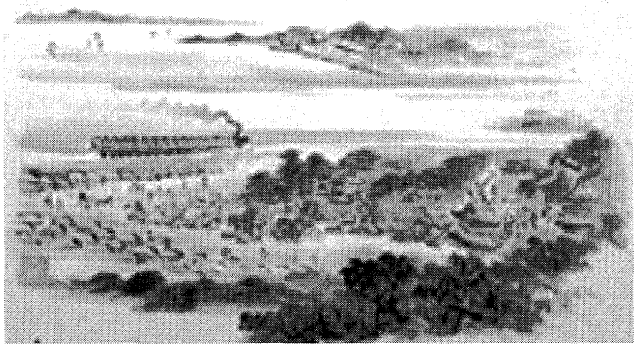

図1－2　品川

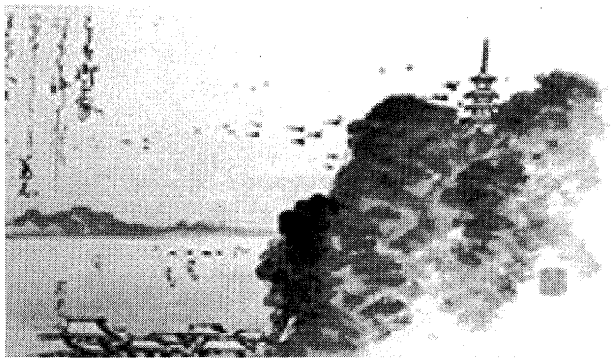

図1－3　増上寺

図1－4　祐天寺

図1－5　目黒不動

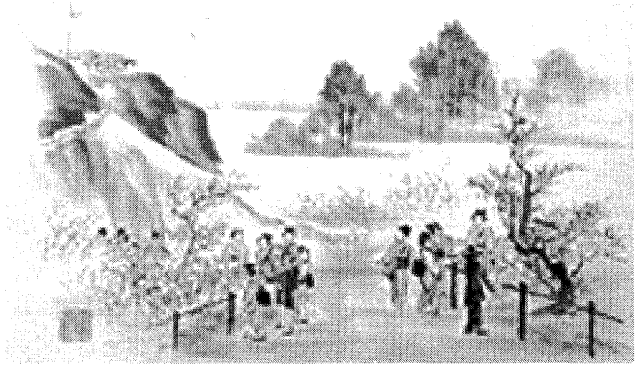

図1－6　大久保

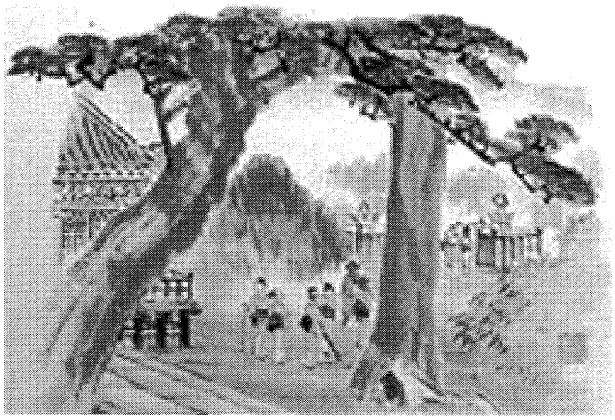

図1－7　鬼子母神

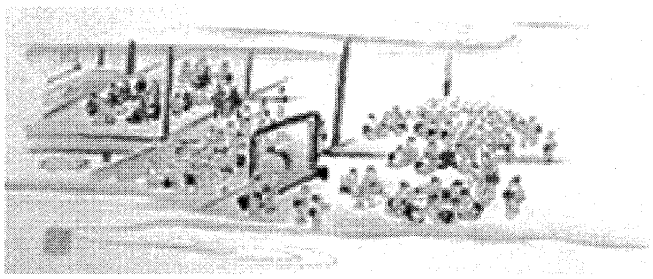

図1－8　祐天寺（昼食）

図1－9　青木昆陽の墓

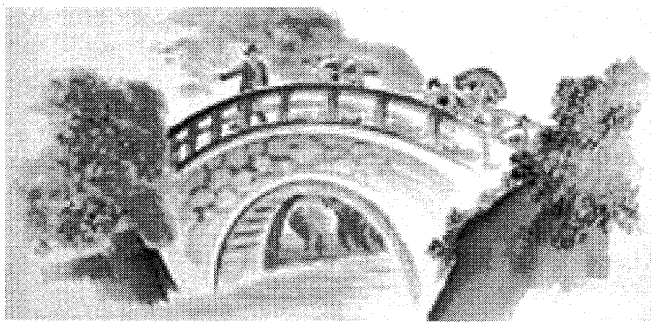

図1－10　太鼓橋

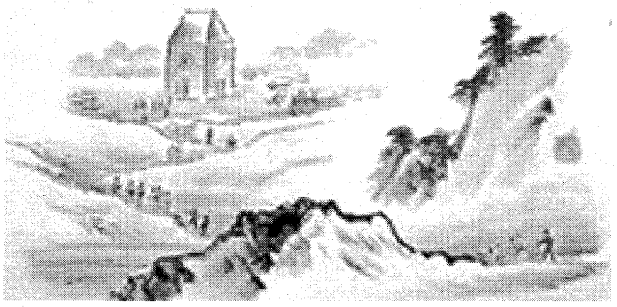

図1－11　恵比寿麦酒製造会社

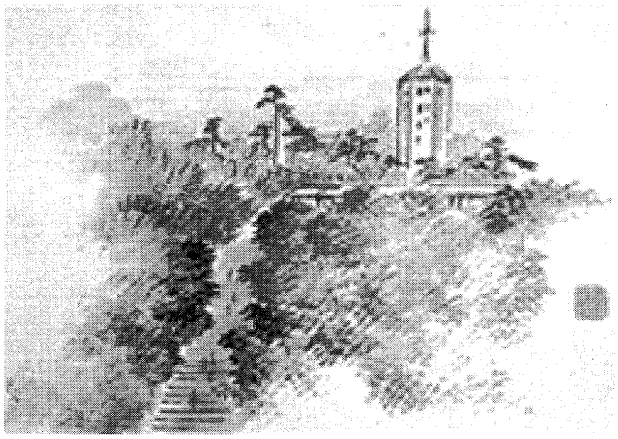

図1－12　愛宕山

けば大門あり。仁王の拳も世離れて、いと仏寂びたり。明顕山祐天寺と言へる額も見ゆ」と説明される。また、門の周囲の森についても「小暗き森」、「青葉の差し入づる頃なれば、郭公の宿りはここならむとは誰も思ひ寄るべし」などと表現されている。

5）目黒不動

①画面中央に山門、奥に独鈷の滝があり、本堂へ向かう石段が描かれている。石段の周りには木が繁っており、林の間から本堂の一部が見えている。境内のあちこちに一行の姿があり、傘を差している女性が5人、帽子に和装の男性[12]が1人描かれている。

②目黒不動が女子どもに人気であることに関して「いつもながら怒り給へる顔つき、いとかしこきにも猶、女小どもの寄り来るこの不動堂こそ怪しけれ」と述べる。そして境内の独鈷の滝の様子が紹介される。また、独鈷の滝で水浴みをして願を立てれば何事も叶うというので、「試検の事もさあらばと立ち寄るは、今日の遊びにもなほ学びのことを思ひ忘れぬなりけり」と、女学生達の様子を記している。

次の段落では、茶屋で休憩をとったことが書かれ、また目黒不動の近所の名所である鷹居松や比翼塚について、「尋ぬる人はいと少なきなるべし」とされている。

6）大久保

①画面左に山（高台に建物あり）、奥に林、中央から手前に、柵で囲まれた躑躅（つつじ）の花とそれを覗き込む一行（女性11人、男性3人ほど）の様子が描かれる。

②大久保の里の躑躅の美しさが「躑躅は今を盛りに、赤きは燃えいづるやうに、白きは時ならぬ雪などの如く。あるは黄金に見ゆるもあれば、その葉の緑なるに照りあひて」と、描写される。赤・白・金・緑で、五色に一色足りないと残念がる者、白い花を一房、園守にねだる者がいたとある。

7）鬼子母神

①画面左手前から伸びている太い松の木の向こうに鬼子母神堂、画面右側の中央には浅岡[13]の墓が見える。女性7人、男性1人が描かれており、うち女性2人は墓の傍に立っている。

②茶屋から「茶めし候へ、酒も候」と声をかけられて、振り返るのは男性ばかりだという記述の後、場面は、祐天寺から「三町[14]」ばかりなるところに」建つ、鬼子母神に移る。「名に高き仙台の浅岡が墓はここにありと聞けば、皆人々詣づ」とあり、浄瑠璃の声などが思い浮かび、浅岡の故事が偲ばれて耐え難かったため、歌を詠んだと書かれている（歌は省略）。

8）祐天寺（昼食風景）

①大広間に、ざっと100人程度の人間が描かれている。床の間には置物が飾られ、掛け軸も見える。画面中央にある、衝立の裏の板の間では、法師たちが飯をよそっており、和装の女性がそれらを運んでいる。一行は、座敷のあちこちに数人ずつ集まって座り、食事を摂っている。

②法師たちに里の名物の筍飯のもてなしを受ける様子が「法師らは、我らの至れるを待ちて、里の名物とて筍飯といふものもてなす。汁あり香の物あり」と記される。そして「飢ゑたるにはあらねど、とくより起きいてありき来しかば、ほとほと眼窪むなど戯れつつ、ひた食ひに食ふ」と、夢中で食べた様子が描かれている。さらに、五椀六椀とお代わりをした後で「今少し味良く炊きたらましかば」など、給仕の女性の耳に入らないように文句を言っているのが可笑しいとある。

9）青木昆陽の墓

①草木の繁る山道とそこを登ってゆく女性15人、男性2人ほどの一行の姿が描かれている。登りきった場所には柵が見える。

②甘藷と青木昆陽の墓について「今は天が下に、もてはやさぬ者も無き甘藷」、「青木翁の植ゑしより興れり。この翁の墓、目黒不動に行く道にあれば、常にこれを嗜む者、いかでかただに見過ごさむ」と書かれる。そして、その墓を訪れた際の感想が述べられる「思ひ思ひにつづら道を這ひ上りて、その墓前にぬかづくは、報本反始[15]の礼を尽くせるか。あはれ今より後、このもの食ふごとに必ず思ひいづるはこの翁の墓ならむかし」と述べられる。

10）太鼓橋

①石造りの橋を渡る女性5人（うち3人は傘をさしている）と、男性1人が描かれている。男性は、前方を

指し示しながら後ろの女性2人と話しているようである。また2人の女性は、欄干から下を覗き込んでいる。川の両岸には樹木が繁っている。

②太鼓橋の位置が「行人権之助などいふあやしき名おへる坂を上り下りするわたり」、形状が「眼鏡の形せる橋」、由緒が「もと薩摩の人、某とかや言ふ者の架けしより」と紹介される。また、皆が小川にこのような橋が架かっていることを珍しく感じ、太鼓橋に興味を惹かれている様子が「傘持て叩くもあり、足に力入れて踏み鳴らしつつ渡るもあるは、この太鼓てふ名に心惹かるるにはあらむ」と書かれている。

11）恵比寿麦酒製造会社[16)]

①確認できるだけで20～30人（うち男性が4～5人か）が坂道を下って麦酒会社を指して歩いている。ところどころに樹木が生えているものの、荒地に縦長の直方体に切妻屋根がのった、会社の建物がぽつんと建っている。

②恵比寿麦酒製造会社の位置が「目黒の停車場よりやや遠ざかるところ」、外観が「煉瓦造りの厳めしき」と紹介され、「名に高き」と形容される。さらに「大なる機械」が動くさまや「釜」の様子も述べられる。それらの用途を説明する人がいたことも書かれている。

また、一行のビール好きな人々が先頭に立ってこの場所を訪れたことが、「今日の連れには、ここに因深き人あるままに、誰も誰も押し寄す」と書かれる。試飲を勧められ、急いで樽の傍に集まるのは男性たちで、氷を勧められて走り寄るのは女性たちだということが、「ともかくも一杯試み候へと言はるるに、早う樽のもとに立よりたるは男どちの髯繁き者」、「この氷召せと言ふに走り寄るは女どち」と記される。

12）愛宕山

①樹木が繁った山の上に愛宕館と屋根がいくつか見える。山上に向かう8人ほどの人影が描かれている。

②愛宕山の祭神のことが「もとは火神を祀れるも、今は大方の人はただ天狗などのやうに言ひののしるこそうたてけれ」と、また眺望について「ここは都にてもいと高台なれば、あまたの甍は足の下に見え、品川の海はるばると波立てる様さへ眼の中に入りて涼し」と説明される。また、愛宕館のことが「この頃は愛宕館と言ふものをも築き建てたれば、その景色一しほなり」と述べられる。

さらに天狗の連想から、人々の話題が高い鼻と低い鼻のどちらが良いかということになり、最後は「（人力車）を引く男が背をさへつつきて苦しき事も出で来べし」と、人力車に乗る時に鼻が高すぎては車夫の背をつつくようなことにもなりかねないという笑い話になったとある。そして「手を携えつつ下りしも、隔てぬ友がきの心さへ見えていと嬉し」と、友人同士の交流の嬉しさについて触れ、最後は「この神もし天狗におはしまさば、いかに見給ふらむ」と、締めくくられる。

以上の場面ごとの詞書の後に、絵巻の作成に関する小中村のあとがきがある。それによれば、この遠足（「目黒のそぞろ歩き」と表現されている）は、5月6日のことであり、小中村は6月の始めに荒木から12枚の絵を与えられた。それが面白かったので、一行に加わった一人として、すぐに文章を付けたという。あとがきの日付は、1894（明治27）年6月19日である。

## 3. 描かれた場所

前項で示したとおり、絵巻には12の場面が描かれている。出発地の女高師前および昼食場面を除くと、図2および表1のとおり10ヶ所となる。なお、図2に示すように、これらの場所の多くは、当時の東京市15区の外側（郡部）にある。

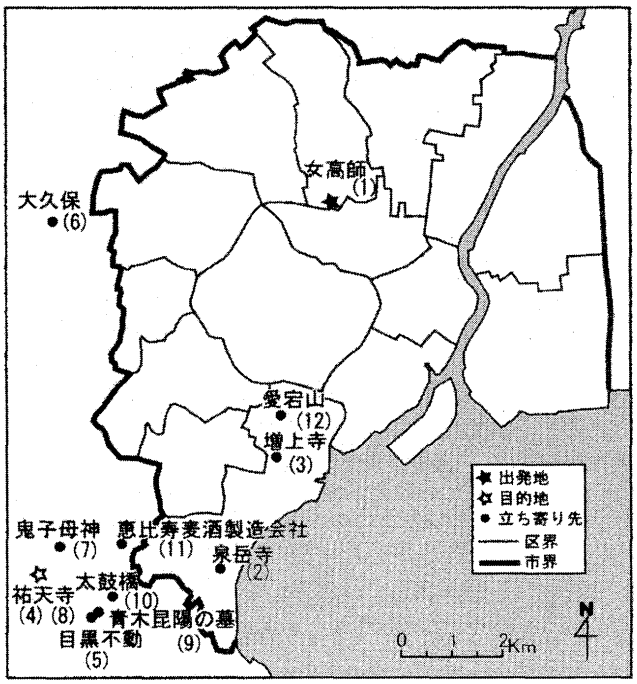


図2　東京市15区と立ち寄り先

主な見物の対象は、寺社など江戸時代から存在する名所であるが、恵比寿麦酒製造会社（1889、明治22年竣工）、愛宕館（料理店、展望台　1889、明治22年開業）などの新興の名所も立ち寄り先に含まれている。また、泉岳寺の場面には汽車（1872、明治5年開通）が描かれている。

表1　絵巻で取り上げられている場所

| No. | 絵 | 詞書中にみられる地名など | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 | 女高師門前 | お茶の水橋 | − |
| 2 | 品川（泉岳寺、汽車、海） | 高輪の丘、泉岳寺 | 鉄道：明治5年開通 |
| 3 | 増上寺（五重塔、海） | 五重塔、朱塗りの大門 | − |
| 4 | 祐天寺（仁王門前） | 明顕山祐天寺 | − |
| 5 | 目黒不動 | 不動寺、独鈷の滝、仁王門、鷹居松、比翼塚 | − |
| 6 | 大久保（躑躅） | 大久保の里 | − |
| 7 | 鬼子母神（浅岡の墓） | 鬼子母神の社、本堂 | 目黒の鬼子母神（正覚寺） |
| 8 | 祐天寺（昼食の光景） | − | − |
| 9 | 青木昆陽の墓 | 目黒不動、青木昆陽墓 | − |
| 10 | 太鼓橋（目黒川） | 行人権之助坂 | − |
| 11 | 恵比寿麦酒製造会社 | 目黒の停車場、恵比寿麦酒製造会社 | 麦酒工場：明治22年操業開始 |
| 12 | 愛宕山 | 愛宕山、愛宕館 | 愛宕館：明治22年開業 |

詞書には、立ち寄り先の様子だけでなく、文章を書いた小中村が受けた印象や、同行の人々の話の内容や行動についての記述もある。これらは、小中村というフィルターを通したものではあるが、一行がどのような事物に関心を持ってそれぞれの場所を見ていたのかを示すものと考えられる。また絵巻が作成された経緯から、この文章は他者に見せることを前提としており、女高師教授の立場を意識して書かれたものと思われる。

それぞれの場所において注目されている事物や話題になっている内容は、前節で紹介したとおりであるが、鬼子母神の場面での浅岡および増上寺での静寛院の墓所への言及や、目黒不動の場面での「学びの道の願い事もかなうだろうか」と話す学生たちの描写などは、女学生の遠足に見合った視点であるように思われる。また、恵比寿麦酒製造会社の場面には、ビール好きの主導で一行が工場を訪れ、男性たちが我先にと争うようにビールを試飲している様子が描かれている。小中村の誇張もあるかもしれないが、この遠足があまり堅苦しいものではなかったことが推察される。

## Ⅲ　明治中期における東京の名所と遠足地との比較

絵巻に描かれた立ち寄り先と、同時期の一般的な名所との比較をおこなう。一般的名所については、観光案内書を資料として用いる。

なお、本章で問題にするのは、立ち寄り先選定に対する観光案内書の影響ではなく、立ち寄り先に選ばれた場所と一般に広く知られていた名所が一致しているかどうか、また同じ名所についての着眼点に違いがみられるかどうかである。

### 1.「絵巻」と同時期に発行された「観光案内書」

国立国会図書館及び東京都立中央図書館の蔵書データベースから、明治1893（明治26）～1895（明治28）年発行の、東京を対象とする観光案内書（以下、案内書とする）をリストアップしたものが表2である。検索のキーワードは「東京」「案内」とし、その結果から修学案内など一般的な観光案内ではない書籍を除いて、リストを作成した。なお、1895（明治28）年発行の案内書は発見できなかったため、1893（明治26）年および1894（明治27）年のもののみを検討対象としている。

表2　絵巻と近い時期に発行された観光案内書

| タイトル | 発行年 | 編著者 | 版元 | 対象範囲 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|
| 東京漫遊案内 | 26年 | － | 栗原吉五郎 | 区部中心 | 巻末に郡部の名所の簡単な紹介あり |
| 新撰東京案内鑑 | 26年 | 小島猪三郎編 | 指南社 | 区部・郡部 | － |
| 新撰東京実地案内 全 | 26年 | 一二三散史編 | 薫志堂 | 区部・郡部 | － |
| 東京案内：一名・遊歩の友 | 27年 | 長谷川園吉編 | 錦近堂 | 区部 | － |
| 東京名所案内 | 27年 | 原田真一編 | 金盛堂 | 区部・郡部 | － |

これらの案内書には、当時の区部のみを扱うものと郡部までを対象とするものがあり、表2の「対象範囲」はその区別を示している。郡部にある大久保や目黒は、区部のみを扱う案内書ではそもそも対象外であり、絵巻の立ち寄り先を全てカバーしているのは、『新撰東京案内鑑』（以下『案内鑑』）、『新撰東京実地案内　全』（以下『実地案内』）、『東京名所案内』（以下『名所案内』）の3点となる。

### 2. 遠足の立ち寄り先と「観光案内書」の比較

1)「観光案内書」の中の立ち寄り先

絵巻に描かれている立ち寄り先の、各案内書における掲載状況を表3に示す。増上寺、愛宕山、泉岳寺は5点全てに掲載されており、知名度の高い名所であったことが確認できる。大久保も躑躅の名所として4点に掲載されていた。また、恵比寿麦酒製造会社は、『案内鑑』の「会社」の項目に、名称と住所のみ記載があった。

目黒における立ち寄り先としては、祐天寺と目黒不動が『案内鑑』、『実地案内』、『名所案内』の全てに掲載されている。そして、鬼子母神は『案内鑑』のみ、太鼓橋は『実地案内』のみに掲載されており、青木昆陽の墓はどの案内書にも掲載がなかった。

表3　絵巻の立ち寄り先の掲載状況

| 立ち寄り場所＼案内書名 | 新撰東京案内鑑 | 新撰東京<br>実地案内　全 | 東京名所案内 | 東京漫遊案内 | 東京案内：<br>一名遊歩の友 |
|---|---|---|---|---|---|
| 泉岳寺 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 増上寺 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 愛宕山・愛宕館 | ○ | ○ | ○ | ○ | ○ |
| 目黒不動 | ○ | ○ | ○ | △ | － |
| 大久保の躑躅 | △ | ○ | ○ | △ | － |
| 目黒祐天寺 | ○ | ○ | ○ | × | － |
| 鬼子母神 | ○ | × | × | × | － |
| 太鼓橋 | × | ○ | × | × | － |
| 恵比寿麦酒<br>製造会社 | △ | × | × | × | － |
| 青木昆陽の墓 | × | × | × | × | － |

○：本文中に掲載あり　△：巻末等に名称のみもしくは簡単な紹介あり　×：掲載なし　－：掲載対象外

2）記述内容の比較

泉岳寺に関しては、絵巻にも案内書にも四十七士への言及がみられる。しかし特に大石父子に触れているのは絵巻のみであった。増上寺については、絵巻にあるように、明治維新以前とは様子が変わってしまったと述べているものが『案内鑑』と『名所案内』の2点、徳川氏の墓所があるとの記載は『漫遊案内』を除く4点にみられた。また、静寛院および文照公は『案内鑑』のみに記述があり、文照公の廟の紹介においては、絵巻同様に日光東照宮の廟が引合いに出されている。また、愛宕山の眺望の素晴らしさは5点全てに、愛宕館（塔）は『漫遊案内』を除く4点に紹介されている。絵巻では、そもそも火神を祀っていた愛宕山が、今は天狗の山だと言われていることが述べられ、話題が鼻の高低のことに移ってゆく。火伏せの神については『案内鑑』に記載されているのみであり、天狗についてはどの案内書にも書かれていなかった。

目黒不動については、独鈷の滝が、郡部を対象とする3点全ておよび『漫遊案内』に取り上げられているが、絵巻のように霊験あらたかであるというような記述は無い。また、絵巻に「鷹居松比翼塚など訪ぬる人はいと少なきなるべし」とある鷹居の松は、『案内鑑』に名称のみが、そして『比翼塚』は『実地案内』に「多く人々に膾炙する所なり」として掲載されている。大久保については、「五色に足らはぬ」という形容は絵巻独特であるが、躑躅が美しいという記述は共通である。祐天寺については、『名所鑑』と『実地案内』に、絵巻にあるように、様々な遺物が所蔵されていることが記述されている。なお、祐天寺の昼食で供された筍は、『名所案内』の目黒不動の項で、土地の名産であり「賞味せんとして来る者多かりける」と紹介されている。鬼子母神については『案内鑑』のみが、開祖が朝岡の局であり、碑もあることを掲載しているが、朝岡についての説明は無く紹介文は短い。

一方、絵巻には「名に高き仙台の浅岡の墓」、「皆人々詣づ」、「浄瑠璃の声も耳に残れる」などとあり、小中村は感に堪えず歌も詠んでいるなど、案内書のあっさりした扱いとは異なる思い入れが感じられる。太鼓橋についても、案内書では『実地案内』が位置や形状を簡単に紹介しているだけであるが、絵巻には、女学生たちが橋の名前や形状を面白がる様子が描かれている。

## Ⅳ　まとめ

本稿では、お茶の水女子大学附属図書館が所蔵している、1894（明治27）年の遠足を描いた絵巻の内容を紹介し、さらにその立ち寄り先と同時期の名所を比較することで遠足の特徴を検討した。

まず、絵巻の立ち寄り先が、一般的な名所と重なっているかどうかを確認するために、1893（明治26）年から1895（明治28）年に発行された案内書をリストアップした。そして、それら5点における遠足の立ち寄り先の掲

載の有無を調べた。

その結果、表3に示すとおり、鬼子母神、太鼓橋、恵比寿麦酒製造会社、青木昆陽の墓は、案内書には掲載が全く無いか1点のみであった。これらは、遠足のコースには組み込まれているが、一般向けにはあまり紹介されていない名所であったと考えられる。恵比寿麦酒製造会社や青木昆陽の墓への立ち寄りには、いわゆる社会科見学的な色合いも感じられる。

記述内容に着目すると、泉岳寺での大石父子、増上寺での静寛院、愛宕山の天狗、鬼子母神の浅岡に関する記述などは、不特定多数に向けた案内書とは異なる、絵巻の作者独特の視点によるものと考えられる。人名が目立つのは、人物に対しては感情移入しやすいため、印象に残ったということかもしれない。

また、静寛院や浅岡の墓所、鬼子母神など、女性に関わる場所が立ち寄り先に選ばれ、記述の面でも大きく扱われていることは、この遠足の大きな特徴であると言える。

同じ観光名所であっても、観光の主体や目的により着眼点が異なり、価値を見出す要素も一致しないことがある。今後は、本稿の結果を踏まえつつ、名所に価値を与えている要素についての検討を進めたい。

本稿で用いた絵巻の読解にあたっては、元お茶の水女子大学院生の氣多恵子氏にご協力いただきました。記して感謝の意を表します。

## 注

1) 1894（明治27）年当時の学校名は、「東京女子高等師範学校」ではなく「女子高等師範学校」であった。
2) 遠足と修学旅行は明治期には明確な区別がされていなかった。
3) 1831（天保2）年～1915（大正4）年。1893（明治26）年より女高師教授。
4) 1861（文久元）年～1923（大正12）年。国語担当教授であり、歌人・国文学者。
5)『お茶の水女子大学百年史』掲載の当時の女学生の写真や、現在の目黒不動・鬼子母神などの境内の様子などから。
6) 毎年春と秋の2回、職員が生徒を率いて郊外に遊歩する行事。1890（明治23）年11月の教員総会においてその実施が決定された（「遊戯会及郊遊会ノ事」.『東京女子高等師範学校記事　甲』）。
7) 高等師範学科1年生～4年生および小学師範学科生の合計人数。『女子高等師範学校一覧』より。
8) 利用可能な交通機関として、鉄道、馬車鉄道、人力車などがある。
9)『女子高等師範学校一覧』の学校職員名簿には女性教員の氏名もあり、一行には女性教師も含まれていたと考えられるが、絵を見た限りでは学生と教師の区別はつかない。
10) 生徒を指すのか、教師も含まれているのかは不明。
11) 文昭公（6代将軍徳川家宣）霊廟
12) 一行の男性か否かは不明。
13) 仙台藩4代目藩主伊達綱村の生母、三沢初子（浅岡局）。歌舞伎「伽羅先代萩」の政岡のモデル。
14) 約330m
15)「本に報い始に返る」（祖先の恩に報いること）。『礼記』による。
16) 正式な社名は、日本麦酒株式会社（サッポロビール株式会社の前身）。恵比寿麦酒は商標である。

## 文献

大泉高士 2000. 雑誌『旅』にみる「旅行」と「女性」－明治30年代における「良妻賢母」思想とツーリズムの接点について. 国語国文研究 117：30-46.
「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会 1984.『お茶の水女子大学百年史』91-93.「お茶の水女子大学百年史」刊行委員会.
五井信 2000. 書を持て、旅に出よう－明治30年代の旅と〈ガイドブック〉〈紀行文〉. 日本近代文学 63：31-44.
北川宗忠 2002.『観光・旅の文化』249-251. ミネルヴァ書房.
小島猪三郎編 1893.『新撰東京案内鑑』（第二編名跡誌）. 指南社.
白幡洋三郎 1996.『旅行ノススメ』113-132. 中公新書.
鈴木章生 1995. 維新期における東京新名所の成立について. 立正史学 77：17-41.

東京女子高等師範学校編 1981.『東京女子高等師範学校六十年史』（復刻版）63-64. 第一書房.
東京女子高等師範学校 1912.『東京女子高等師範学校記事　甲』98.
女子高等師範学校 1894.『女子高等師範学校一覧（明治 27 年)』93-98. 忠愛社.
長谷川園吉編 1894.『東京案内：一名・遊歩の友』錦近堂.
原田真一編 1894.『東京名所案内』金盛堂.
一二三散史編 1893.『新撰東京実地案内　全』薫志堂.
平野稔 1971. 大分県における明治体育史の研究－運動会・遠足について. 大分大学経済論集 23-4：69-102.
増井貴子 1999. 明治中期学校日誌にみる「遠足」「修学旅行」の原初形態－関尋常高等小学校の事例. 岐阜県歴史資料館報 22：163-112.
守田顕三 1983. 明治期の石川県における学校体育の発達（第 10 報）：小学校の遠足・修学旅行（1). 石川県農業短期大学研究報告 13：32-41.
山本光正 2003. 観光地としての東京. 国立歴史民俗博物館研究報告 103：201-234.
著者不詳 1893.『東京漫遊案内』栗原吉五郎.

（2005 年 12 月 1 日受理）